
ブルーホリデー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーホリデー

【Nコード】

N7671D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

久代は妊娠したのかどうか考え不安に苛まれ悩んでいた。そのことを彼氏に打ち明けようかどうか迷いそして遂には。大人の女の人の悩みです。よくあるお話でしょうか。

第一章

ブルーホリデー

有坂久代には今悩みがあった。それは女にしかわからない悩みであつた。

ここ暫く来るべきものが来ない。それであつた。

「何か最近あんたおかしいわよ」

「そうかしら」

勤めている百貨店のジュエリーショップで同僚にもこう声をかけられていた。

「別にそうじゃないけれど」

「一体何があつたのよ」

久代とその同僚の渡辺淳美は従業員用のトイレで話をしている。

久代は大柄でしっかりとした体格である。どちらかといえば肉感のある感じだ。それに対して淳美は小柄で痩せている。髪の色も久代が茶色で淳美が黒であり実に対象的だ。ただ目元はどちらも二重で大きくそれが似ていると言えた。

「そこまで暗いなんて」

「実はね」

「ええ」

久代はここでふう、と一旦溜息をつきながら淳美に言うのであつた。

「来ないのよ、あれが」

「あれがつて？」

「生理が」

それが理由なのであつた。ここでまた暗い顔を見せてきた。

「来ないのよ。もうそろそろ来てもいいのね」

「それつてつまり」

淳美はそれを聞いて事情がわかった。女でなくともわかることで

あつた。

「あれ？できたってこと？」

「そうかも。だからこうして」

「できたって。あんたまだ」

「結婚するつもりはないわよ」

それははつきりと言うのであつた。顔も顰めさせている。

「今はまだ。そんなことは」

「そうよね。やっぱり」

二人は化粧を整えている。話の内容のせいか久代の動きが普段より鈍かった。

「まだ二十四だっけ」

「あんたと同じ歳じゃない」

久代はこう淳美に言い返した。

「同期で入って。そうでしょ？」

「そうよね。そういえばそうだったわ」

「思い出したでしょ。そうよ、二十四よ」

自分の歳をまた言ってみせてきた。

「結婚はもう少し先について考えているから」

「じゃあ結婚しないで産めば？」

「それも嫌よ」

これは久代の個人的な考えであつた。

「やっぱり子供ができれば結婚しないと。駄目よ」

「できちゃった婚でもそれでもね」

「だからよ。本当にできていたら」

またそれを考えるのであつた。暗い様子で。

「結婚しなくちゃいけないじゃない」

「彼氏はどう考えているの？」

淳美は今度はそれを尋ねてきた。頬にファンデーションを当てながら。

「そこんところはどくなの？」

「さあ」

それに対する久代の返事は随分心許ないものであった。

「どう考えているのかしらね」

「何よ、それ」

今の久代の言葉に淳美は呆れた顔を見せてきた。

「彼氏の気持ちも大事じゃない。それもなしで一人で悩んでも何にもならないわよ」

「それはわかつているわよ」

久代もそれに応える。少し怒って顔を彼女に見せたので唇がずれてしまった。それを鏡で見てまた顔を顰めさせるのであった。

「しまった」

「なおした方がいいわね」

「ええ、これはね」

淳美に応えて実際にそれをなおす。唇の出過ぎた紅が消えたが久代の心はまだ戸惑いが色濃く残っていたのであった。

「とにかくよ」

久代はそのうえでまた言う。

「言えないのよ」

「何だよ。言わないとどうしようもない話じゃない」

相手あつての話だ。だからこれは当然であった。だがそれでも久代はまだ渋っている様子であった。

「それでどうして考えているのよ」

「言えないのよ」

久代はこう答えた。

「どうしてもね」

「言えないって？またどうしてよ」

「彼、そういうの言ったらどうなるかわからないから」

久代は今度は目を顰めさせた。それと共に手の動きが止まった。

「不安なのね」

「ええ。まさかとは思うけれど」

ここで心の中を不安が覆い尽くしたのであった。

「別れるとか言い出したらどうしようかしら」

「その時は無理にでも責任取らせなさい」

随分強気な淳美の言葉であった。

「そんな男許していたら駄目よ」

「あんだ、気が強いよね」

「女はそうじゃなくちゃ駄目よ」

今度ははっきりと言い切ってみせた。

「そんな男許していたらいけないに決まってるでしょ」

「それはそうだけれど」

「それによ」

ここで淳美はまた言うのであった。

「今度は何？」

「あのね、久代」

鏡に久代の方を見上げる淳美が映っていた。それは彼女自身もわかっていて。その鏡の姿を意識しながら話をするのであった。

「それにあんだ彼氏だけれど」

「ええ」

「あんだが選んだんでしょ？」

それを彼女に問うのであった。

「性格は間違いなくいいからって。それでだったわよね」

「ええ、そうだけれど」

久代もそれは自分で認めるのであった。実は彼女が今の彼氏と付き合うようになったのはその優しく穏やかで丁寧な性格を見て自分で告白したからだ。意外と積極的に攻めたのである。少なくともその時はだ。

「だったら。自分の目を信じなさい」

「私の目を」

「それによ。彼氏を」

ここでまた淳美は言う。

「確か。名前は」

「前川清司よ」

彼氏の名前を言ってみせた。

「そうよ、前川君。彼を信じないの？」

「別にそうじゃないけれど」

「だったら信じなさい」

淳美の言葉は言い聞かせるものになっていた。少し怒ってさえいた。

「そうじゃなければ何なのよ。そうでしょ」

「ええ、まあ」

頼りない言葉だがそれに応えるのであった。

「そうよね、やっぱり」

「そういうこと。じゃあ決まりね」

淳美は強引に話を終わらせるのであった。それと共に今化粧も終わった。

「それじゃあそういうことでね。いいわね」

「え、ええ」

久代は戸惑いながらそれに応えた。

「じゃあそっちのお化粧が終わったら戻るわよ。いいわね」

「ええ」

こうして化粧を終えてトイレを出る。久代はこの場はその悩みを忘れることにした。しかしそれはその彼氏との一緒になった帰りでまた再発するのであった。

第二章

彼氏の名前は前川清司という。背が高くきりつとした顔をしており久代に合っているといえた。久代もそう思っているのだが今回はそうしたことは考えられなかったのだ。理由は言うまでもなく彼女の悩みからだ。清司の方もそれに気付いたのか彼女に声をかけてきた。

「あのさ」

「何？」

夜道を歩きながら声をかけてきた彼氏に顔を向けて応えた。

「今日どうしたの？暗いけれど」

「そうかしら」

「そうだよ」

その彼女にまた言うのだった。

「何かあったの？よかったら話して？」

「何でもないわ」

けれど今は言えないのであった。今は。

「何でもないんだ」

「ええ。それよりもね」

そうして淳美との話通りに言うのであった。

「今度の土曜だけれど」

「ああ、二人共オフだったよね」

実はあえて同じ日に休めるようにスケジュールを調整しているのである。それだけ関係が深くなっているということだが今はその結果のせいかも知れないことで悩んでいるのであるから久代の心は複雑であった。

「だったら。何処に行く？」

「映画とかどうかしら」

久代はここでこう提案してきた。

「駄目かしら。それは」

「映画ね」

清司はそれを聞いて歩きながら考える顔になっていた。

「いいね、それ」

「そう。その映画はね」

「ああ、この前観たといってってた映画があるじゃない」

今度は清司が言ってきた。

「久代ちゃんが観たいって言っていた映画。それを観に行こうよ」

「それでいいの？」

「うん、僕はそれでいいよ」

清司はにこりと笑って言ってきた。端整な顔なのでそうした笑みも似合う。実は彼女は彼のそうしたところも気に入っているのである。

「じゃあそういうことでね。土曜ね」

「ええ。映画の後は」

「食事だね」

これが二人のデートの定番であった。最後は二人で何かを食べて終わる。いつもこうしてデートを楽しんでいるのだ。だから清司も特におかしいとは思わなかったのだ。

「それでいいかな」

「私は。それでね」

久代はさりげなくを装って清司に応えた。

「いいわ」

「それじゃあ決まりだね」

彼もそれを受けて頷いた。

「じゃあ次の土曜ね」

「ええ」

（その日に）

応えながら心の中で決意を固めるのであった。

（言わないと。絶対に）

「じゃあ。今日はどうしようか」

「今日はもうこれでいいじゃない」

住んでいる部屋は違う。それでこう言うのだった。今は一人になりたいのだ。

「家までで。別れましょう」

「そうだね。ところでさ」

ここで清司は話を変えてきた。

「どうかしたの？」

「いや、この前買ったゲームだけれど」

実は彼はテレビゲームが好きなのだ。最近でもやり込んでいるソフトがあるのだ。

「随分難しいんだよね、どうにも」

「そうなの」

「ラスボスが強いんだよ」

こう言っただけでやいてきた。

「あんまりにも。あの会社のゲームはいつもそうだけれど」

「そんなに？」

「うん。今回は特に」

今度は彼の方が困った顔になっていた。もっともそれも久代から見れば全く取るに足らない悩みであったが。それでも悩んでいるのは事実であった。

「滅茶苦茶な強さで。どうしたものかな」

「ネットで攻略法とか調べてみたの？」

「調べてみたけれどね」

それでも上手くいかないらしい。浮かない顔からそれがわかる。

「それでも。難しいね」

「そうなの」

「それでもだよ」

彼は言う。

「今日こそは倒してエンディング見るから」

「そう、頑張つてね」

「うん、そうするよ」

そんな話を夜道でする二人であつた。久代はその中でも決意を固め続けていた。そうして曾於土曜はすぐにやって来た。久代はとつてきおきの服を着てデートの待ち合わせ場所に向かつた。駅前の噴水のところである。そこに行くともう清司が待っていた。彼はシツクな黒つぽい服に身を包んで赤いマフラーをしていた。久代のプレゼントである。

「待った？」

「ううん」

清司は久代に顔を向けてにこりと笑つて応えてきた。

「今来たところだよ」

「そう、よかった」

にこりと笑つてきたその清司の言葉を聞いてまずは微笑むのであつた。しかしそれでも心の中はやはり悩みが支配していたのであつた。

第三章

「それじゃあ。行きましょう」

「うん、わかったよ」

こうして二人は手をつなぎ合って映画館に向かった。その間少し時間があったのでクレープを買ったりして時間を潰していた。だがそこでも久代の顔は晴れないのであった。見れば彼女の服も黒を基調としておりお世辞にも明るいものではなかった。

「あのさ」

清司はそんな彼女を見てこの前の帰り道と殆ど同じ感じで彼女に声をかけてきた。

「今日も何か沈んでないかな」

「それは別に」

「そう。だったらいいけれど」

それを聞いてまずはそれで止める清司であった。しかしここで彼はまた言ってきた。

「今日はさ」

「何？」

「映画終わったら行く店だけね」

話はそれに関してであった。

「イタリアンレストランでどうかな」

「イタリア料理？」

「うん。ほら、あそこ」

彼は微笑んで久代に言うのだった。

「あの一品一品が物凄く量の多いお店」

「ああ、あそこね」

そこまで聞いて彼女もわかった。それで頷く。

「あそこなのね」

「あの店でいいよね」

また彼女に言ってきた。

「ええ。オリーブと大蒜も多いし」

「久代ちゃんそういうの好きだと思ったから」

実はイタリア料理、とりわけパスタにおいてオリーブやガーリックを効かせるのが彼女の好みなのである。清司もそれを知ってその店を出してきたのである。

「じゃあそこでいいよね」

「ええ。わかったわ」

やはりあまり微笑まずに彼の言葉に応えるのであった。

「それじゃあ映画の後でね」

「うん。そこでね」

映画の後での店も決まりそこに向かうことになった。映画は特に何も変わったところはなく普通に面白いものであった。だがそれでも楽しめないのが今の久代であった。映画館の暗がりの中ではそれはわからないが暗かったのは事実だ。だから映画の内容もあまり覚えてはいなかった。この映画が終わったらいいよ言わないといけない、そう考えてばかりいたからだ。それしか考えられない状況になっていたのである。

しかし清司はかなり楽しんだようで。映画館を出たところで満面の笑顔で彼女に言ってきたのである。

「面白かったね」

「そうね」

久代は俯いて暗い声で応えるのであった。

「中々よかったわ」

「本当にそう思ってるの？」

「え、ええ」

こう言われると慌てて顔を上げて応えた。

「そうだけれど」

「そうかな。まあいいや」

ここでも彼はそれ程深くは尋ねなかった。

「それじゃあさ」

「ええ。夕食ね」

「そう。 Pastaだよ」

清司は機嫌よく応えるのであった。

「Pasta。食べようよ」

「わかったわ。 Pastaをね」

「ワインもあるよ」

清司はまた言ってきた。

「だから。 楽しくね」

「はい。 それじゃあ」

浮かないままであったがそれでも清司と共に行くのであった。こうしてそのイタリアンレストランに二人で行くのであった。洒落た内装にイタリアの音楽であるカンツォーネが鳴っている。如何にもといった感じの明るい店であった。そのままイタリアの明るさを入れたかのように。

久代と清司は其中一个のテーブルに向かい合って座っている。久代が壁側に座っていて背中を丸くさせている。ここでも浮かない顔のままであった。

「乾杯だね」

「ええ」

清司は勢いがあつたが久代のそれは弱いものであった。その彼女に清司が言うのである。

「ところでさ」

清司は一杯の赤ワインを飲んだ後で久代に尋ねてきた。

「どうしたの、今日は」

「今日はって？」

「だから気付いているんだよ」

清司は穏やかな声で久代に尋ねてきた。

「何か。 悩みがあるんだよね」

「それは」

「隠さなくていいよ」

清司の方から言ってきた。

「何かあるのなら。言ってみてよ」

「それは」

「あるのならね」

また穏やかな声で言っのであった。

「よかったら言って」

「それは」

「あるのかな」

まるで誘うかのように穏やかな声をまた出してみせてきた。

「どうなの、そこは」

「それはね」

どのみちここで言うつもりであった。だがそれでも決意することができなかつたのだ。だがここで彼の言葉を受けて久代は背中を押された。それが決め手となったのであった。

「実は。最近」

「どうしたの？」

「驚かないわよね」

弱気だったがこう前置きしてきたのであった。

「何があっても」

「うん」

彼はここではまだわかっていなかったがそれでも頷くのであった。

「約束するよ。何？」

「私ね」

久代も緊張で強張るのであるが清司もまた緊張で強張っていた。それまで穏やかな顔であったのが今では張り詰めた空気の中にあつた。その中で話を聞くのであった。

「あれが来ないの」

「あれって？」

「だから。あれが」

恥ずかしくてさらに俯くがそれでも言っただけであつた。

第四章

「来ないのよ」

「? どういうこと?」

「私。できたのかも」

遂に言った。一言であつたが。

「ひよつとしたらだけれど」

「何だ」

「えっ!？」

驚いたのは久代の方であつた。清司の何だといった素っ気無い言葉にかえつて驚いたのだ。これは彼女の予想していないことであつた。

「できたのつて。僕の子供だよね」

「え、ええ」

「だつたらいいよ」

穏やかな顔に戻つて笑うのであつた。

「久代ちゃんが浮気するような娘じゃないつてのはわかつてるしね」

「いいの? 本当に」

「結婚。するんだよね」

「それは」

「だつて。子供ができたじゃない」

結論としてはそうなるのだがそれでもそれを言つ勇氣はなかつた。しかしそれを自分からあえて言つてみせたのが清司の男としての優しさであつた。

「だつたら。そうなるよね」

「あの、清司君」

久代は恐る恐るその清司に問うてきた。

「私でいいの?」

「僕あまり言葉上手くないけれどね」

はにかんだ顔を久代に見せてきた。その顔で彼女に伝えるのであった。

「久代ちゃんだから。いいよ」

「いいの。私だから」

「うん。じゃあ聞くよ」

今度は清司が尋ね返すのであった。

「久代ちゃんは僕じゃ駄目なのかな」

「清司君じゃなきゃ駄目って」

「そこはどうなの？僕と結婚するのって嫌？」

「い、いえ」

慌てて首を横に振ってそれを否定する。こうしたところで嘘のつける久代ではない。それがその態度にもはっきりと出ているのであった。

「私も。清司君だから」

「そうだよ。じゃあそれでいいじゃない」

また穏やかな顔で応えてみせてきた。

「これからも。宜しくね」

「ええ。これからも」

もうそれまでの暗い悩みは完全に消えてしまっていた。考えてみれば清司の性格ではこうなる。それを考えずにただ一人悩んでいた自分が馬鹿に思える。しかしそれもまた終わろうとしていた。何もかもが幸せに包まれようとしていたのだ。

「じゃあさ」

「ええ。今度は何？」

「お酒は控えた方がいいよね」

「あつ、そうね」

彼に言われてそれにふと気付く。

「子供がいるのなら」

「そうだよ。けれど」

清司はまたその優しい、穏やかな笑みで言ってみせてきた。

「食べるのはいいよ」

「パスタをね」

「さあ、どんどん食べて」

そう言っ て今来たパスタを勧める。来たのはペンネアラビアータであつた。赤いトマトとガーリック、そしてオリーブの中にペンネがある。久代の好物の一つである。

「それで。僕達の赤ちゃんの栄養にして」

「そうね。何かもう」

にこりとした笑顔でまた言う。

「悩んでいたのが馬鹿みたい。清司君の言葉を聞いてそう思えてきたわ」

「悩むことなんてないんだよ」

清司はまた久代に言うのであつた。

「何にもね。じゃあパスタを食べて音楽を聞いて」

「二人のこれからをね」

「祝うとしようよ」

「ええ、わかつたわ」

久代はまた笑顔になつた。その笑顔の中で喜びを感じる。悩みは何時しか消え二人と、そして若しかしたらもういるかも知れないもう一人のこれからの幸せについて考えるのであつた。明るいイタリアの曲をその耳に聴き美味しいパスタを食べながら。暗い青の悩みはもう消えて明るい赤の幸せになつていた。その中で清司の優しい笑顔を見ているのであつた。

ブルーホリデー

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7671d/>

ブルーホリデー

2010年10月8日14時09分発行